

悲か喜か

「ジュンサンシスシキニチ」

六月七日朝九時頃この電報を受け取った。準さん、福山の藤原準之介君はとうとうみ仏の国に往つてしまったのだ。

人間は皆死ぬる。私もまた死ぬるのだ。死！この厳粛な事実の前に立った時、大概なもちものは、けし飛んでしまう。

準ちゃん。君と最後に会ったのは、そしてそれがこの世のお別れであったのは、五月二十二日だったね。それから十六日ぶりの今日、永遠に君は、三十一歳を一期としてお浄土へ帰つてしまった。

五月二十二日、岡山に行く朝、途中下車して、あの松浜町の海辺の草庵のような家に見舞つた時、準ちゃん、お前はどれだけ喜んだか。見る見る両頬には熱い涙の流れが見えた。

「おいお念仏が申せるか。」

君は、お念仏で答えた。

「毎日お念仏の中で会つてはいるものの、やっぱり人間だから会いたくて……。」

側には、君と一緒に双人社書店を開業した安さんがいる。私について来た松中氏と釜瀬君と五人で心を一つのお念仏。あの時の笑顔が見えるよう。

「準さん！俺は体が丈夫で、東奔西走している。お前は、病でここに寝ているが、高い所から見られたら同じことなのだ。俺だつて病になったら、お前と同じようにお念仏申すことしか許されないのだ。お聖教のただの一行でも、これが真実であることを体をもつて示す者は、尊いことだ。君はそれを成就した。」

君は、につことして微笑した。

「この月の初頃はあまりに苦しかったので、中井先生が、葉の盛り方で、この苦しみをさせずに、早くみ仏の国に行かして下さいと思いましたが、だが、ああ、悪い心をおこした。相済まない。どんなに苦しくても、そんな相済まぬことを考えたのは悪かった。中井先生に、そしてみ仏にあやまりました。」

準ちゃんの眼は涙にぬれつつも異様に輝いている。そうだ、病でなくても、人間は死んだ方がましであると思う日はあるよ。しかし、その中に再び念仏の世界がものを言うのだよ。

「天下の同志は、知るも知らぬも、準ちゃんの事を念じている。念仏の世界を恵まれたからだね。」

「三十一歳まで生きさせられて、こうしたありがたい世界を恵まれて、何も求むることはない。」

念仏の子は出世の本懐を成就したのだ。死を現前にひかへつつ、何という明るさであり、静けさであり、平気さであるか。

「釜瀬さん。わしは君を恨んだよ。何故来ると言つて来てくれなかったか、と。病人には妥協はないのだよ。達者なものは、それぞれ忙しいとは知っているが。」

そうだが、一刻の暇なく、苦しい、そして死を思う人には、妥協はないのだ。それであるが故に、なまぬるい人生観や、いい加減な信仰は許されないのだ。死を考え、念仏する者の生活こそ、精進そのものである。

その時、私は最後に、聖光の「華園」を読んだ。君は念仏して聞いていた。時々辛そうな咳をしつゝ。それが私から君にみ法を語った最後だった。

「それではお別れするよ。」

起ったが、これが今生の最後であることを憶ふと、幾度も幾度もふり返らざるを得なかったが、思いきって階段を下りた。それが予想通りお別れであった。

君は、商業学校を出た。しかし貧しかった。変圧所の電工になったり、本屋をしたり、そうした間にも病魔と闘っていた。あの市村の蔵王山で雪の中に血をはいたのを思い出す。仕事の帰りにも、よく咯血したと言って帰って来た君であった。準ちゃんお前もまた、不幸な一人であった。

しかし、私は決して君を不幸だとは言い得ない。あり余る富、大きな邸宅に住んでいる人の中にも、君よりはもつともつと根本的な不幸な人があるかも知れない。

念仏の子、準ちゃん、「おめでとう」うるむ心の中にも、はつきりと呼ぶ。

親鸞聖人にも、御自身が、大法を聞き、念仏を廻向されて「慶哉」と仰言つた外にも一つ喜ばれたことがあった。それはお弟子方の尊い大往生をお聞きになった時である。

「何事よりも明法御房の往生の本意遂げて在しまし候ふこそ……めでたきことにて2候へ。」

「明法御房の往生のこと驚き申すべきにはあらねども、返すがえすうれしく候。」

「平塚の入道殿の御往生の事きき候ふこそ、返すがえす申すにかぎりなくおぼえ候へ、めでたき申しつくすべくも候はず。各々みな往生は一定と思召すべし。」

聖人の御感懐、ほのかにわからして頂ける気がする。

「さりながら人の世はみな春の雪」句仏上人

父も逝きました。吉政のぢぢも、河野市次郎さんも、北次爺も、栗栖はるの姉も、市野原弥太郎君も、一郎、寅市、三郎……数えれば限りないほど、いい人たちが皆あの世へ念仏道に乗じて帰って行った。浄土の豊かさを憶う。そして今日又準ちゃんも亦往つてしまった。

静かに念仏申す時、人は何をしなければならぬかをしみじみと思わせられる。

今ちようど午後二時、静かにお念仏してこの悲喜一体の心を遙かに福山に捧げる。

「あとに残る母も妻も子供も、皆私のあとを追ふて……念仏に生きてくれるように。」

君の言葉ではあった。物言わぬ君の周囲の残された悲しき人たちのことを憶う。子にゆかれた母、若き未亡人、父なき子供、又しても大地は人を涙の底につれてゆく。残れる不幸の人たちよ。念仏に生きてたまえかし。